Y10b　流星電波観測の公開天文台としてのリード

○豊増　伸治（みさと天文台）

2000 年以来筑波大学小川宏氏とのＦＦＴ画像によるネットワーク経由での流星電波観測を行ってきたが、この間に大きな発展があったので、公開天文台における天文教育的な側面を紹介したい。

当初公開天文台としての資質（立地条件、機材の大容量化低価格化、ネットワーク常時接続、研究施設として見た場合の資源の不完全性）を生かした研究観測方法として、観測生データの公開を開始した。この方法は、ある程度の観測方法・基礎技術が確立していれば、ネットワーク常時接続が普及すれば、あらゆる場所で実現可能であった。ネットワーク時代ではあるが、一般の方への働きかけとしては出版物（ＣＤ－ ＲＯＭ添付）の効果が絶大であった。観測内容がアマチュア無線技術などに非常に近いこと、ＦＦＴソフト（大川一彦氏のＨＲＯＦＦＴ）の操作の簡便性などの好条件が重なり、スムーズに世界にも拡大できるものとなった。

しし座流星群などをきっかけに、ネットワークを通じての世界中のリアルタイムデータの観察がどこでもできる状況が実現したことは、研究費やイベント費の投入ではなく、教育を通しての作業の分散化・発展と、それを支えたそれぞれの個人的努力の成果である。今後の観測内容の発展（集計作業の効率化などを含む)、このような共同観測体制の方法としての別分野への活用、科学教育的価値の普及、科学館・公開天文台・学校などでの教育方法としての整備などを期待したい。